

夏の丘

岡本俊弥



少女は空港の見える丘に登る。

着古したワンピースに汚いサンダル履き、長めの髪の毛はゴムで一つにまとめている。

見渡す限り、埋め立て地が広がっていた。

遮るものがないから、湿り気を帯びた海からの風がいつも吹き付ける。波の音は聞こえない。朝昼を問わず、絶え間なく離着陸する宇宙機のエンジン音がすべてをかき消してしまうからだ。都会のどんな物音も及ばない一四〇デシベルを越える轟音だったが、少女は気にしなかった。

最初は学校の遠足だった。

教師に連れられ、やかましく騒ぐ同級生たちと長い距離を歩いてやってきた。遠くからでも音は聞こえた。ロケット雲が沸き上がるのが見えた。

これが何なのかは、授業で何度も教えられる。ロケットのお家があるところ、みんなのだいじなお仕事のためにあるところ、これからのお国の生活にとって、かけがえないものである、と。

デフォルメされた絵が載る教科書では、実感が掴めなかった。学校の図書室にあるぼろぼろになった本を探し、ロケットがどこに飛んでいくのか、どこから帰ってくるのか調べたこともある。

だが、はじめて見た宇宙港は少女の想像を超えていた。

広い、とてつもなく広い。

それにたくさんのロケット、宇宙機が数え切れないほど並んでいる。

宇宙機はさまざまなデザインで塗色されている。鮮やかな原色である赤や青、華やかなオレンジやサーモンピンク、二色や四色に塗り分けられたものもある。国旗や紋章、文字、数字、抽象的だったり、写実的だったりするデザイン。ペイントではなく

金属表面に加工されているのだと聞いたことがある。

少女にとって、色は重要ではなかった。あれに乗れば、空の彼方にある星の世界へ  
と行けるのだ。遠い星から飛んできた、あるいは遠い星へと飛んでいくものたちな  
だ。

いまでも、少し離れたところに一機が垂直降下して着陸する。

どこからの便なのだろう。

間を置かず、手前から真っ赤に塗られた機体が垂直に離昇していく。

低学年の生徒の足では大変だったが、少女はほとんど毎日やってきた。

宇宙機の型式はさまざまだった。概ね直径一〇メートル、離昇時の高さが一二〇メ  
ートルほどもある外形は共通していた。

宇宙機は、地上から宇宙空間までの往還機と、本体である宇宙船の二段を積み上げ  
て組み立てられている。旅を終えて帰ってくる宇宙船と、宇宙船を宇宙にまで送り届  
けた往還機は、それぞれ別々に着陸する。

身近では見られない。空港パスを持たないからだ。アクセス路に警備兵が立ち、ゲ

ートに近づくことさえできない。

ただ、数キロも離れた丘の上からの遠望でも、十分にその大きさは分かる。離着陸のたびにモバイル・ランチャー経由で乗客が乗降する。シャトルバスさえ小さく見える。人なんて、おもちゃにたかる蟻のようだった。

いつか乗ってみたい。

そう思うからこそ、見飽きることがない。

空港は二十四時間運用されている。夜は、長く尾を引くロケットの火柱が見られる。空港エリアの照明も明るかったが、どんな灯りもあの炎にはかなわない。気のせいかもしれないけれど、そのたびに気温まで上がる。冬でも夏のように感じる。

少女の家がある村まで、数キロは離れている。街灯のない夕暮れの道路を、なかば駆けるように帰るのが日課だ。

少女が宇宙飛行士に出会ったのも、丘の上だった。

立て膝で座り込み、夢中で見続けていた。

「へえ、ここはよく見えるな」

いきなり声がした。振り向くと、そこに若い男が立っていた。

いつの間にか、少し離れた背後に一台の自動車が止まっている。真っ赤なオープンカーだった。車には長い髪の女が座っていて、煙草の煙が風に流れていた。

「きみは、この辺りの子なの」

少女はうなずくが返事はしない。

「警戒させたかな。大丈夫、邪魔はしないよ」

男は笑顔を浮かべると言った。

「宇宙機を見るのが好きなのか」

「……うん」

「ぼくはあの船に乗ってる」

少女は驚いた顔をする。

空港の手前側、男の指さす先には、赤いストライプの模様が描かれた宇宙船が駐機している。

「……おととい、降りたやつだね」

男は改めて少女の顔を見た。

「毎日見てるのか。ほんとうに好きなんだな」

「……どこから、来たの」

「どこから。ああ、あの船は火星から飛んできた。片道飛行に一ヶ月、往復だと潮待ちで半年はかかる航路だ」

「火星、どんなところなの」

「土地は寂しいところだな。森も海も川もない。乾いていて、とても激しい風が吹く。でも、たくさんの人が住むようになっていいる。賑やかな町もある。定期航路も開かれています。ここからも定期便がでていいる」

「定期便に乗ってるの」

「ぼくが乗っているのは定期船じゃない。貨物と人を混載して不定期に飛ぶチャーター船だ」

「何回行ったの」

「ああ、もう十往復くらいかな」



「すごい」

「はは、ありがとう」

「火星が一番遠いのところなの」

「一番じゃないな、他の星はもっと遠い。小惑星帯や木星はずっと遠い。でも、軌道ステーションや月までなら、すぐいけるよ」

「いけるかな」

「きみがかい」

「……うん」

「いけるよ、きみが大人になったら」

男は微笑むと、車の方へと戻っていった。女の人との話し声がしたあと、車はゆっくりとターンし、丘を降りていった。

ほんとうに、いけるのだろうか。

少女は村に帰っても、あのとときの会話を繰り返して思い出した。

「なに言ってるの」

母親は面倒くさそうに少女の話を受け流した。

「あそこは、そんなとこじゃない。遊び場じゃないんだ」  
不機嫌そうに吐き捨てた。

あれだけ働いている両親でも、行けないところなのだ。

未舗装の路地を挟んで、細長い平屋の住宅が並んでいる。トイレと浴場は共同、台所の他には一部屋があるだけの棟割り長屋だ。同じ間取りの長屋が、何列も並んでいる。ところどころに、村人相手の小さな商店がある以外は何もない。そのかわり、土埃の舞う狭い路地には子どもが溢れている。

村は空港があるからこそ存在できた。

住人の大半は空港の仕事で生計を立てている。どういう仕組みなのか分からなかったが、空港の人手を要する仕事は、最終的に村人に降りてくるのだという。そのため  
に設けられた村なのだ。村の住人は、さまざまところから集められた。

朝から夜遅くまで、父親も母親も空港に勤め、昼間の村は子守りをする年寄り子ども  
どもしかない。

農業もままならない痩せた土地、そもそも自分のものでもない土地では、他に生きるすべがないのだ。

五年が過ぎた。

少女は学校を卒業し、両親たちと同じ空港で働くことになった。

十四歳になっていた。

少女は幸運だった。空港実務を想定した実習授業でよい成績を上げ、整備棟での勤務に就けたからだ。六年間の初等教育後に、二年間の職業訓練がある。親たちのようにフロアや駐機エリアでの単純労働ではなく、頭がよくなければ務まらない仕事だといわれた。

少女たちの進路は決められていた。初等教育が終わるころには、この先どうなるのか想像がつく。空港を嫌うものもいた。そんな仲間にとっては、仕事は苦痛でしかないだろう。

少女にとっては空港こそが目的だった。どんな形であれ、あそこで働ければそれで

よかった。宇宙へ行く夢の非現実さも分かった。少しでも近づければ、と思うだけで口にもしなくなつた。

勤務が決まったあと、父親と珍しく話ができた。半ば愚痴のような、諦めのような口調だったが、娘が働けることを喜んでいた。ここで採用されなければ、村から出て行かなければならない。

「清掃といつても、一日がかりだ。何人も出て、旅客の邪魔にならない時間を見計らつて掃除をする。待ち時間が何時間にもなることもある。おれたちは目立ってはいけない。人目に立たないように作業をする」

空港に入れるのは旅客と乗員、地上作業員、警備の軍人だけで、労務者は補助員としてのみ入構できる、それが建前だ。しかし、実際は労務者が職員の過半を占めていた。灰色のつなぎ服を着て、ふだんは地下にある専用待機所に詰めている。表には姿を見せない。

「人のいないところは大変だ。空調がないから、恐ろしく暑いことも寒いこともある。強風が吹き抜ける場所もたくさんある。重いものや、危険物の収集もある。楽な仕事

じゃない」

重機が必要な機体関係を除けば、作業の多くは人手で賄われている。荷物の搬入や搬出も含め、無数の労務者が働いていた。収入は十分ではないが、生きてはいけるだけ幸せだった。

「おまえの行くところが、ちょっとでもましなところならいいのにな」

どうあればましなのか、比較するものを知らない少女には思いも寄らなかつた。

空港は拡張が続いている。海岸の埋め立て工事は、少女が生まれる前から始まり、永遠に終わることがないようだった。波頭が見えた海ははるか彼方に後退し、ただ広い空き地が次々と作られていった。第二駐機場、第三駐機場と、計画は後から後から生まれていった。

村もまた人口が膨らんだ。見知らぬ住人がどこからか連れてこられ、新たに生活を始めていた。学校の校舎が足りず、仮設校舎が何棟も増築された。学年のクラスが二〇を越え、学校の分割が計画された頃に、少女は千人余の同期とともに卒業したのだ。少女は髪を切った。背が伸びて、父親を凌ぐほどになった。

整備棟は巨大な施設だった。

宇宙船や往還機が何機も収められ、分解整備されている。そんな棟が空港内に何カ所もあるようだった。計器を使って、機体を計測している技術者たち。離着陸エンジンを分解し、部品の入替えをするヤード、クレーンで吊り下げられた宇宙船を往還機に据え付けるかさ高なヤードもあった。どの作業場所にも空きはなく、一機の機体が運び出されると、次の機体が入ってきた。

少女は技術者ではない。整備員が説明なしに指示を出し、ただ従うだけだ。清掃や片付け、部材の運搬などが主な仕事だった。外気から遮断されているわけではないが、部材倉庫は一定の温湿度に保たれた環境だった。

そんなある日、少女は男を見かけた。

整備中の往還機の横で宇宙飛行士の制服を着て、技術者と何か話をしていた。すぐに気がついた。

少女には村人以外、知り合いがない。男は別世界の住人だった。顔立ちや声、服装まで、鮮明に記憶に刻まれていた。五年間で少し厳つさが増したようだったが、あ

まり変わっては見えなかった。それに比べれば、自分はもうあのときとはまるで違う。服だって男女の区別のないつなぎだ。向こうは憶えてもいないだろう。

少女は立ち止まって黙礼し、通り過ぎようとした。誰であれ、空港関係者には敬意を示す必要がある。

「おい、きみ」

呼び止められ、少女は顔を上げる。

「どこかで会ったことがあるね、どこだったかな」

「はい、丘の上で」

思わず答えていた。

「……でも、あのときのわたしはまだ子どもで」

「丘というと、ああそうか空港が見渡せる丘だった。あの子がきみか、面影が残っている。憶えてるよ、大人になったな。空港に勤めているのか」

「はい、今年からです」

顔が赤らんだ。

「この棟で働いているのか。最初からここなら筋がいいんだな」

「ああ、はい」

「自信を持ったらいんだ。遠慮はいらない。がんばっていれば、そのうち火星にも行けるさ」

男は微笑んだ。昔少女が言ったことまで憶えているのか、と少女は驚いた。

いまの立場ではあり得ないことだと分かっていた。頂点にいる旅客と飛行士と、裏方の整備士や技術者までが人間だった。自分たちは道具なのだ。だが、からかわれているようには聞こえなかった。本気で可能だと思っているのか。

「ありがとうございます。失礼します」

少女は戸惑いを隠すため、もう一度頭を下げると、小走りです事に戻った。

さらに十年が過ぎた。

少女は大人になったが、心の底にはまだ宇宙にアコガれる少女が生きていた。仕事の経験が増え、村や職場での人間関係も学んだ今でもだ。



空港には新しい管制塔が建設された。

これまでの駐機場から少し離れたところに、広い新駐機場が作られた。軍専用の施設だった。もともと国防上の要衝として、空港施設の運用は軍隊が担っていた。しかし、警備の兵士や管制官を除けば、軍人が表に出てくることはなかった。

新駐機場には、真っ黒に塗られた見慣れない宇宙機が降りるようになった。そこは軍人しか入れない隔離エリアだった。

少女は三級班長に昇格した。より上位の技術者に付いて、労務者への指示を出す管理者の立場だった。わずかな手当が出て、労働時間は長くなる。それでも、少女には誇らしいことだと思えた。知人はだれもが喜んでくれた。

どこまで上がれるのだろう。現場の職階はそれほど多くない。班長の中で一級から三級の区別があるだけだ。労務者はしよせん労務者だった。本当の上位職、技術者や飛行士にはなれない。

責任の重い班長とはいえ、実務を免れるわけではなかった。

少女は毎日機械油や埃にまみれながら、仕事を続けた。宇宙機の整備間隔は短くな

っているようだった。ある程度間を置いて投入されていた機体が、連続して使われるようになった。当然故障も増えていく。熟練技術者の何人かが配置転換となり、忙しさは大きく増した。軍の工場に移ったのだと噂された。

「宇宙船の着陸エンジンを、本体から取り外す必要がでてきた」

少女たちの班は、エンジンの分解を担当したことはない。

「了解しました。指示に従います」

当日の朝、分解班の応援に参加するよう命令が出たのだ。別の棟にあるエンジン整備工場だった。

「防護服の着用を点検し、配置に付け」

宇宙船には着陸エンジン以外に、宇宙空間用のエンジンがある。それには原子力が使われている。化学燃料エンジンより数倍の比推力があるからだ。宇宙空間に出ると、原子力エンジン用のノズルが機体の後方に延ばされ、惑星間の航宙でメイン使用される。噴き出るガスには放射線が含まれる。いくらかは着陸用の化学燃料エンジンにも付着する。原子炉自体は遮蔽されているのだが、エンジンに関わる部品を分解すると、

被爆する危険性が常にあった。

作業の妨げにならない程度の簡易防護服だった。全員の着用状況は、エンジン班の班長とともに確認した。

目の前には宇宙船が垂直に起立している。機体は見たことのない破損をしていた。エンジンカウル付近に穴が開いていたのだ。何かが発射した痕のようだった。重大な事故なのだろうか。しかしよく着陸できたものだ。

「原子炉は正常だ。残留放射線にだけ注意せよ」

どう注意するのか分からなかったが、エンジン班の指図に従えばよいとされた。

エンジンを覆っているパネルを、一つ一つ取り外していく。作業は労務者が行い、技術者数人が遠巻きに見ていた。

現場で、少女は宇宙船の構造について説明を受けた。

宇宙船は先頭の居住部とエンジン部に分かれている。原子炉を積む関係で、その間には隔壁が設けられている。エンジン部には、四機の化学燃料エンジンと、中央の原子力エンジンが置かれていた。原子力エンジンは、放射線による汚染を防ぐため、着

陸時には使用されない。今はノズルが閉じられた状態で、閉回路になって冷却されている。

破孔のあるパネルは外れにくかった。撓んでいるので急に動くかもしれない、気を付けろと指示が出た。だが、クレーンのパワーを上げた瞬間、大きな音を立てて固定フックが吹き飛びんだ。パネルが空中に舞うように落ちた。

技術者たちの間でざわめきが起こった。

「待避！」

離れたところにいた技術者が叫んだ。

「さがれ、いったん後ろにさがれ」

班員に負傷者はいなかったが、全員工具を置いて命令に従った。

「まづいな」

一言、そう呟くの聞いた。技術者の持つ計器が警告音を鳴らしている。

むき出しになった宇宙船のエンジン部が見えていた。着陸エンジンは大きく破損していた。そして、中央にあるはずのノズルの遮蔽板が開いているように見えた。

宇宙船の原子力エンジンは単純に作られている。ガスを直接反応炉に送り込んで、ノズルから高温で噴出させる。ノズルは反応炉と直結しているのだ。

「全員、棟内から待避する」

どれほど危険なのか、そのときは分からなかった。嚴重な防護服を着た専門技術者が遮蔽板を元に戻したが、棟の相当な面積が汚染されていた。除染のため、作業が一ヶ月以上遅れる重大事故だった。

棟から離れた連絡通路で、少女たちの班は防護服を脱いで座り込んでいた。物理的、機械的な事故はしょっちゅう起こっている。けが人も珍しくはない。ただ、汚染事故は経験がなく、実感が湧かなかった。

ヘルメットを手に持った技術者と飛行士が横を歩いて行く。すると、船長の記章を付けた男が立ち止まって声をかけてきた。

「久しぶりに会うな」

男は、少し白髪 of 交じったこと以外、前と変わらなく見えた。少女は立ち上がって頭を下げた。

「お久しぶりです」

「作業班にきみもいたのか。危険な仕事をやらせて申し訳ない」

「お気遣いありがとうございます。だれも負傷していません。あれは、船長の船だったのですか」

「ああ、わたしの船だ。帰っては来れたが、損傷が大きかったので、どうなるか分からないがな」

「直しますよ。わたしたちのお手伝いしている整備班なら」  
「ほう」

船長は少女の作業服にある記章を見た。

「なるほど、仕事に自信があるわけだ、すばらしいよ」

「デブリとの衝突ですか」

「…詳しく話すことはできないが」  
間をおいて続けた。

「あれは事故じゃない。もっとややこしい問題だ。いま宇宙は危険な状態になってい

るんだよ。昔のような安全な旅は難しい」

「いったい何が」

「悪いけど、きみたちに政治の話はできないからな」

少女は混乱するが、機嫌を損ねたのなら、それ以上問い詰めるわけにはいかない。

「……失礼しました」

再び頭を下げた。

「気にするな」

男は、またあの笑顔を見せて歩み去った。

船が修理されるまで、何回か男を見かけた。一度は民間人の服装をした女性と話をしていた。よくは見えなかったが、丘のオープンカーにいた人かも知れない。あれからなら、もうずいぶん経つ。結婚しているのかも知れない。

昔なら感じなかった苛立ちを覚えた。

民間人はどんな暮らしをしているのだろうか。少女はふと思う。

空港職員は村とは違う町に住んでいる。でも、旅客になれるほどの民間人なら、も

つと遠くの都市部に住まいがある。学校で習ってもいない都市の生活など、考えたことすらなかった。

少女の生活には変わりがない。仕事は忙しさを増したが、労務者村での生活は同じで、両親と同じ家に住んでいた。建物の傷みが酷くても、新居の割り当てはない。かつての友人たちは、空港の関係者と結婚しているようだった。労務者同士なら両親と同じだ。だとすると、先は知れている。

多忙さの中で、自分がこれからどうなるのか、どうしたいのか、将来を考える機会は減っていった。

五年が過ぎた。

少女は二級班長になっていた。二級ともなると、部下に三級の班長が数名付く。もちろんその下の班員も部下だ。まるで学校のクラスを一つ預かったようなものだ。管理の業務でも手が抜けなくなった。

臨時の作業と思っていたエンジン整備が、いつのまにかメインの仕事になった。機



体に穴を空けるほどの重大事故は、もう珍しくなくなっていた。技術者用の正規防護服を着て作業する機会が増えた。汚染を前提とした、隔離修理棟が設置された。

動乱が起こっている。

少女にまで、動乱のうわさは伝わってきた。村で聴くラジオのニュースに、そんな報道はなかった。空港の乗務員などが口にしたつぶやきや、捨てられた新聞に書かれていたことだった。

都会のどこかで反政府活動が活発化し、破壊工作が行われているという。植民都市では、気密を破る破壊が頻繁に行われている。都市全体の一般市民までも危険に晒す行為だと書かれていた。

活動には指導者がいない。交渉できる相手がおらず、模倣犯が後を絶たない。犯人は市民に紛れているのではなく、不満を抱えた市民そのものだった。経済状況が厳しい植民地には多くの技術者がいる。ピンポイントを破壊する小型爆弾の製造くらいなら難しくはない。犯人探しと逮捕は、何年にも渡って繰り返される。

「おれたちが修理する宇宙船は、マキビシにやられているそうですよ」

部下の一人が小声で話しかけてきた。

「どこで聞いたの」

「うわさですよ、どこでってことはない」

「あんまり不確かな話は広めない方がいいよ。自分のためにもならないから」

労務者は働くことしか求められていない。知りすぎても、疑い深くなっても、得られるものは何もない。

仕事に専念するよう部下の指導を怠るな、直属の技術者からは何度も念を押された。空港の中枢になるこの職場ならなおさらだった。

マキビシは、本当は何と呼ばれるのだろう。

軌道上に投入され、無作為に船を攻撃する兵器の通称なのだ。耐用年数が短いため絶えず打ち上げられる低軌道衛星に交じっているのだという。超小型で簡単なセンサーだけを持っていて、船を見つけると軌道を変えて体当たりしてくる。爆薬など必要ない。弾丸と同じ効果がある。マキビシは相手が軍用なのか、民間機なのかは区別しない。装甲を持たず数の多い民間船の方が、圧倒的に被害が大きい。

惑星間宇宙船は原子炉を抱いている。貫通すれば致命的で、もう地上には降りられない。だが、微小の穴が開いている時が問題だ。修理のため、空港に来るかもしれない。そういう船は危険だ。

翌日の昼近く、少女は丘の上に立った。シフトが変わって、昼過ぎからの勤務時間だったが、いつもより一時間ほど早い時間に目が醒めたのだ。

空港の風景は一変していた。

視界を埋め尽くしていた宇宙機の森は、まばらになっていた。

第二駐機場は異様だった。無数の宇宙機が横倒しで置かれている。ほとんどが輪切りされた残骸なのだ。原子炉だけを取り外し、後は野ざらしだった。大破、修理困難な民間機の機体はすべてここに運ばれる。

旅客が大きく減っているのは、裏方の少女にも実感があつた。警備は以前よりも嚴重になり、旅客エリアも縮小されていた。仕事が減っている、労務者は減るのではない、両親は不安を口にするようになった。

宇宙航路は閉ざされてしまうのか。

少女は胸に穴が空いたような虚しさを覚えた。

遠くにある軍のエリアだけは活気づいている。黒い森は勢力を伸ばし、頻繁に空へと飛び立っていった。

一機の宇宙船が着陸しようとしていた。赤いストライプが描かれている。

船長の船かもしれない。

職場は緊迫感に包まれていた。少女が入ると、技術者からすぐに指示が出た。

「炉心事故の可能性がある、備えてくれ」

班員は防護服を着て、該当する宇宙船を待ち受けた。半ば予感したように、モバイル・ランチャーで運ばれてくる宇宙船には、赤いストライプが入っていた。

見える範囲での痕跡はない。しかし、線量計の数字はすぐにレッドゾーンに振れた。通常なら棟内に持ち込めないレベルだ。だが、旅客の使う駐機場に放置するわけにもいかない。

船長がいた。記章で分かったが、顔は防護服でよく見えない。船の傍らに立ち、班員に声をかけた。

「詳しい位置は分からないが、軌道上で原子炉を貫通した破孔が、下降する途中で広がったようだ。まず漏洩を特定して、ふさぐ作業を行ってくれ」

「了解しました」

船を運搬してきたランチャーのタワーに上り、損傷個所を確認する。班の数名が担し、計測器と目視で探すのだ。原子炉の内部はガスで冷却されている。その漏れが目安となる。一時間ほどの作業で、おおよその破損個所が分かる。まるで針で貫いたような穴だった。そこから、放射線をとまなうガスが大気中に漏れ出していた。

班員たちは、タングステンを織り込んだ遮蔽テープを手にして、穴をふさぐ。あくまでも応急処置だ。すると、空間線量率自体は減少した。だが、完全に密閉されたわけではない。原子炉は冷温停止にまで至っていない。

「よくやった。いったん退避する」

遮蔽された地下の待機所で防護服を脱ぐと、船長は少女に気が付いた。白髪が増え、顔色が悪い。五年を経ているといっても、年齢より生気が失せたようだった。

「また会ったな。今日のご苦労だった」

「いえ、いつもの仕事です」

「おれもいつもの仕事だ」

そういうと、苦笑いを浮かべた。疲れた表情だった。

「運行船がどんどん減っています。船長も大変なのではないですか」

「そうだな……」

間を置いて続ける。

「宇宙を飛ぶのは限界だろう。宇宙船はこういう事故に対処できない設計だ」

「軍はたくさん飛ばしていますが、あれは……」

「軍用機は装甲が厚い代わりに、人や資材が最小限しか積めない。軍が幅を利かせる宇宙では、民間航路は寂れていくだけだ」

「航路が寂れてしまうと、火星や月はどうなるんでしょう。自立できるのですか」

「できるわけがないさ。彼らは地球からの補給で生きている」

「それなら、どうして動乱が」

「動乱を知っているのか。まあ当然だな、空港にいるんだから耳に入る。動乱は経済

の道理が分からないものたちが起こしている。不満が蓄積しはけ口がないから、たとえ自滅する道でも、社会の崩壊を望んでしまう。指導者がいないから歯止めも効かない」

「いったいだれが」

「だれが」

船長はしばらく黙り込んだ。

「だれなのか。現場の労働をしているものたちだ。肉体労働を提供し、その対価を得ているものだ。都市ではインフラ維持や、物品の配達、清掃に従事している。たくさんいる。ああ、もちろんきみたちは違う」

「どこが違うのですか」

「きみたちは命令に従って、まじめに仕事をしている。だが、そういう正直なものばかりではない。都心にいるわたしの妻は、爆破に巻き込まれて負傷した。暴力でしか意思が示せない輩は、排除するしかない」

あの女性は都会にいるのだ。

「犯人は労務者なのですか」

「そうだ、きみたちの仲間だ」と言ってから、付け足したように同じ言葉を繰り返した。「もちろん、きみたちは違うが」

そうなのか。

船長の口調が意味するものは、少女の中に冷たい塊を生み出す。空港を脅かす動乱は確かに容認できなかったが、船長とわたしたちは仲間ではないのだ。船長たちと、わたしたちとは。

外部からガスを供給することで、辛うじて原子炉の冷温停止ができた。労務者を何人も動員し、穴の封止に成功したからだ。宇宙船はまた飛べるようになった。だが、もう地上には降りられないだろう。放熱フィンを広げれば自然冷却が可能な宇宙空間と、人の住む地上とは違う。応急修理しただけの船は、本来なら廃船にすべきだった。

班員のうち数名が体調を崩した。長時間の曝露作業を行った者たちだった。復帰は難しい、担当医師は班長である少女に伝えた。

数日後、公募の布告が出た。



空港で働く労務者から、植民地勤務の希望者を募るものだった。詳細は書かれていなかったが、反徒の集う植民地の労務者を強制的に入れ替える計画なのだった。植民地のすべては無理だが、中枢施設に限って実施する。施設には、当然現地の空港も含まれる。

宇宙に行ける、空を飛べる。

計画の裏の意味に嫌悪感を憶えながら、少女の奥底で昔の希望が湧きあがってきた。二度とはないチャンスだ。応募したら、両親とは別れることになる。戻ってはこれないだろう。だが、残ったところで、空港が存続する保証などない。

「火星に行けるよ」

船長は立ち話で教えてくれた。

「向こうの空港は、赤い砂漠のなかにある。視界一杯が砂漠だが、季節によって景色は変わる。風の音も聞こえる」

映像で見ただけでは実感できない。この目で見ない限りは。

少女はためらわずに応募した。

メンバーが発表されると、エンジン班の大半が含まれていた。半数以上は指名だった。地球の空港でのメンテナンスは危険すぎる。すべてを植民地に移管するという理由だった。少女は一級班長に任命され、新たな部下が多数加わった。

少女は夏の丘に立った。

季節は秋を過ぎ、冬の気配がした。制服である作業衣だけでは肌寒かった。

最初の時から、もう二〇年が過ぎた。寂れた現在の空港ではなく、ほんとうの少女だったころの空港が目のまえに浮かび上がる。

タイヤが砂利を噛む音がした。振り返ると黒いワゴン車が姿を見せた。横向きに停車すると、船長が車から降りた。反対側に向かい、扉を開け車椅子を下ろした。

車椅子には、白い服を着た誰かが座っている。

「きみか」

船長は短く言った。

「紹介しておくよ、ぼくの妻だ」

車椅子の女性はサングラスをかけ、髪は短く刈り込まれていた。昔の面影はなかった。女性は無言だった。

「妻は何も聞こえない。見ることもできない」

少女は黙って続きを待った。けれどそれ以上、容態の説明はなかった。

「風にあたると体調が良いみたいだ。地上にいる間は、ドライブをしてやっている」

「船長、今度の航海は……」

「ああ、もちろん乗務する。帰ってきた次は分からないがな」

「奥様はどうされるのですか」

「ふだんは施設にいる。ドライブなんてごまかしてみたいなもんだ。してもしなくても、大勢には影響しない」

体調を崩した班員は、仕事復帰ができなくなれば、入院施設から退去しなければいけない。違いはある。

少女は空港に視線をもどす。労務者を送るための宇宙機は、船長の船と併せて三機が待機していた。百名を火星植民地に送ることになる。

船長と少女は無言のまま、冷たさを増した風の中にあつた。

翌朝、三機の宇宙機は予定通り打ち上げられた。

長い炎を引きながら、宇宙機は上昇する。宇宙空間に到達すると往還機を分離し、飛行は順調に進んだ。窓のない宇宙船の船内は、高加速度下から一挙に無重力へと変わる。地球を周回した後、火星への航路に向けて原子力エンジンを始動する。そのとき、異常が発生する。補修力所から再びガスが噴出したのだ。超高温に加熱されたガスは、着陸用化学エンジンの燃料に引火する。宇宙機は火を噴き、瞬く間に爆発の火炎に包まれる。機体は四散する。

少女が何を感じたのかは分からない。